

対人依存欲求尺度の作成

Development of a scale for interpersonal dependency needs

松本 千明

Chiaki Matsumoto

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：依存，対人依存欲求尺度，尺度作成

Key words : Dependency, Scale for interpersonal dependency needs, Development of a scale

1. 研究目的

1.-1 愛着と依存性

愛着と依存性は、類似した概念である。まず類似点として、愛着、依存性の現象もポジティブで適応的な側面をもっている。次に、愛着と依存性の異なる点として、愛着では、依存性にはない、愛着スタイルというタイプに分類することができる。さらに異なる点として、依存性は、愛着では捉えることができない、現実的な対人関係における機能を説明することができる。そして、愛着も依存性も捉えることができる範囲には、限界があると考えられる。各概念には守備範囲がある。愛着が重要な他者の2者関係で説明する現象と説明できない現象がある。愛着は機能として捉えることはできず、関係の強さによって説明できる。その関係には親子関係や情緒的な結びつきが強い関係において成り立つものである。対して依存性は、誰に、何を、どの程度という機能として捉えている。より現実的な対人関係を説明し、機能として捉えることが依存性ではできない。

1.-2 甘えについて

甘えは、依存性の近接概念として考えられる。甘えは、土居(1971)により“「甘え」の構造”が出版されて以来、甘えに関して様々な考えや異にする意見が出て議論されてきた。土居(2007)では、“甘えが日本の感情であるという事実をよりどこにしながら、他方ではその普遍的意義を主張した。このように主張したのは、「甘え」の感情の根底にすべての人に共通する本能的なものの存在を認めたからであり、それが私のいう依存欲求である”としている。そして関(1982)では、“甘え”を依存性の概念に包含されるものとして扱っており、依存性に甘えを含めた研究は行われている。その

ため依存性を捉える上で甘えは必要な概念であると考えられる。

1.-3 これまでの依存性の尺度について

これまで開発された依存性の測定尺度を概観すれば、高橋(1968a)の依存欲求尺度と田中(2003)の依存欲求尺度は、依存対象ごとへの依存欲求を、また、関(1982)の依存欲求尺度と竹澤・小玉(2004)の対人依存欲求尺度関(1982)は、対象を限定しない個人の依存傾向を測定するものであり、それぞれが捉える依存性は異なる。

1.-4 本研究の立場

本研究で作成する依存性尺度で測定できるのは、回答した研究協力者自身の欲求であり、個人の依存欲求である。そのため本研究から明らかになった依存性の在り様に関しては、個人の依存欲求ということになる。

1.-5 目的

本研究では依存性という、尺度作成を試みる。そして、新たな依存性尺度を作成し、その尺度の信頼性と妥当性の検討を行う。これにより、男女、大学生及び社会人の依存の様相を明らかにすることを目的とする。

1.-6 方法

[調査対象]: 青年期 20代・30代の大学生 250人(男子 125人・女子 125人)・社会人 250人(男性 125人・女性 125人)

[調査期間]: 2022年4月に実施

[調査方法]: アンケート調査(株式会社クロスマーケティングに委託)

[調査項目]: 質問紙構成は以下の通りである。

(1) 依存性尺度 70項目、妥当性を確認する項目 3項目。項目の選定は、本研究を行う院生と指導教員計2名により行われた。候補項目には、含ま

れなかった 10 項目を新たに加え、依存の機能ごとに分類した。そして理解しやすい表現になるように留意しながら、適宜文言を整理し最終的に 70 項目を作成した。評定の選択肢は、5 件法で行った。

(2) 基本属性 (年齢や性別, 都道府県)

[分析方法]: 統計処理は SPSS・Amos を使用。

尚, 本研究は令和 3 年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得て行われた (承認番号: 03-033)。

1.-7 結果

依存性尺度は、「情緒的依存因子」6 項目、「道具的依存因子」6 項目、「甘え因子」5 項目の 17 項目で構成された (図 1)。信頼性は、.907 であり、概ね有していることが明らかとなった。妥当性については、概ね有していることが明らかとなった。重回帰分析の結果から併存的妥当性、17 項目すべての項目の負荷量が .46 以上であることから、因子的妥当性、先行研究と同様な因子構造が導出されたことから内容的妥当性を有していると考えられる。

1.-8 考察

因子分析や共分散構造分析の結果から、依存性尺度は、情緒的依存因子、道具的依存因子、甘え因子の 3 つの因子から構成された。すなわち、依存性は、情緒的依存欲求と道具的依存欲求と、および、それらを求める個人の在り様である甘えから捉えられると考えられた。情緒的依存因子は、他者との情緒的な繋がりや、やり取りを求める依存の機能に関わる因子であり、道具的依存因子は、問題解決のために他者からの道具的な支援を求める依存の機能に関わる因子である。また、甘え因子は、個人が抱く依存欲求を、他者が受け入れてくれることを期待し、依存する傾向に関わる因子である。そして、本研究における依存性は、情緒的依存および道具的依存を他者が受け入れてくれることを期待し求める傾向と定義された。本研究の意義は、定義を定めるという事を実証的に行った点、青年期の依存構造を明らかにしたという点において意義があったのではないかと考えている。



図 1. 依存性尺度 17 項目の共分散構造分析結果

2. 研究実施内容

神戸で開催された日本心理臨床学会第42回大会を聴講し、尺度作成や依存性、依存性の近接概念である、自立、愛着、甘えといった事に関する理解が深めることができた。また、依存性や尺度作成などに関する多くの文献を読むことで、依存性に関する知見を深めることができた。さらに6月専攻内で開催された修士論文中間発表会を行い、様々な指摘を得て、より詳細な研究計画へと修正を行った。そして、7月には、人間文化研究科の中間発表があり、他専攻の先生方からのご教授を頂き、近接概念との関連を考えるとよいという、ご指導を頂いた。そのご指導を踏まえ、修士論文では、問題の部分で、依存性と近接概念に関して、記述することができた。そして2月には、専攻内口頭試問、人間文化研究科の修士論文発表会で、修士論文を発表することができた。

3. まとめと今後の課題

研究の問題点および今後の展望は以下の三点である。第一に、妥当性を十分に検討することが出来なかったと考えている。第二に、本研究では「誰か」を項目内に入れて質問紙調査を行った。そのため、母、父、恋人、友人といった対象ごとの依存欲求を明らかにするために使用できる尺度であるか検証することが出来なかったため、さらに検討が必要ではないかと考えている。第三に、これまで導出されてこなかった甘え因子を、甘えとい

う言葉を用いてと因子名を命名したことについては議論する余地があると考えている。

また修士論文として、本研究を提出することができた。今後の目標としては、さらに構成について検討し、学会等でポスター発表をできる準備をしていきたい。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和4年度大学院生研究助成(B)(DB2234)より研究助成を受け行った。

主要参考文献

- [1]高橋 恵子 (1968a). 依存性の発達の研究 : I 教育心理学研究, 16, (1), 7-16.
- [2]高橋 恵子 (1968b). 依存性の発達の研究 : II - 大学生との比較における高校生女子依存性 - 教育心理学研究, 16, (4), 216-226.
- [3]高橋 恵子 (1970). 依存性の発達の研究 : III - 大学・高校生との比較における中学生女子の依存性 - 教育心理学研究, 18, (2), 65-75.
- [4]竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.
- [5]田中 優 (2003). 依存欲求尺度の作成, および, 信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究 4, 229-239.